

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21830061

研究課題名（和文） 在日中国人を対象とする日本適応の支援に関する社会心理学的研究

研究課題名（英文） A social psychological study on how to support Chinese in Japan to adapt Japanese Culture

研究代表者

毛 新華 (MAO XINHUA)

大阪大学・人間科学研究科・助教

研究者番号：90506958

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、「さまざまな文化から来日した外国人に対して、一律な支援を提供している」従来の研究を改めて、特定文化の出身者を対象に、徹底的に彼ら適応上の特徴を明らかにし、サポートしていくことを目的とした。この目的を達成するために、まず、在日外国人の中で多くの割合を占める中国人に注目し、彼らの日本文化適応について特有なニーズに調査を通して明らかにした。その上で、ニーズに照らし合わせ、「体験学習 (Experiential Learning)」の方法論に則って、適応を促進する訓練のプログラムを開発した。さらに、訓練の実践を通して、プログラムの効果および持続効果を検証した。

研究成果の概要（英文）：Previous studies suggest that it is a problem to provide uniform standard supports of cultural adaptation to foreigner in Japan who come from different cultures. The purpose of this research is (a) to clarify the people's needs in adapting Japanese culture focus on a particular culture and (b) to find out a way to support them for their adaptation. To realize the goals, first, we highlighted Chinese students in Japan who are the biggest group in foreigner students in Japan and investigated what are they distressed in their interpersonal relationships with Japanese. Second, with using the methodology of Experiential Learning, we developed training programs to encourage Chinese students' adaptation by considering the contents of their distress. At last, the effects and holding effects of the programs were discussed through carrying out the training and follow-up investigation to Chinese students in Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	680,000	204,000	884,000
2010年度	960,000	288,000	1,248,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,640,000	492,000	2,132,000

研究分野：社会心理学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：文化適応, 在日中国人, 日本適応, 社会心理学

1. 研究開始当初の背景

外国人の異文化適応の最重要課題は「円滑な対人関係の形成」である。従来の在日外国人適応の研究には、外国人がその出身文化によって、それぞれ特徴があると強調される一方、特定の文化の出身者の持っている日本人との対人関係上に特有なニーズは解明されていない。外国人の日本文化適応をはかる研究のほとんどにおいて、外国人共通の問題点からできあがった一律的なプログラムを、千差万別の異なる文化の出身者に提供している。その結果、プログラムは誰にどこまで効果があるかが不明瞭である。外国人を一律的に扱うこの種の研究の限界を踏まえ、特定の文化を対象に、徹底的にその特有なニーズを掘り起こし、より効果的な支援が必要だと考えている。

そして、日本における外国人の適応研究には、適応させる方法がほとんど認知行動療法を中心に行われている。すなわち、対象者に適応に関するポイントを認知させて、モデリング、ロールプレー、フィードバックを用いて、行動を実演させることである。しかし、このような一連の手続には、適応内容を対象者に押しつけることが多く、結果的に、適応の抵抗が出たり、適応行動が長続きをしなかったり、限界が多いように思われる。

在日外国人の適応がより効果的になる可能性

以上のようなことを考慮した場合、これまでの在日外国人への支援に関する研究は不十分であることがわかる。本研究では、外国人への捉え方を見直し、そして支援の考え方を改めることに通して、より効果的な異文化適応が可能になると考えている。このような考え方を踏まえ、本研究においては、在日中国人を特定した上、より適応する側に視点を置くらボラトリー・メソッドによる「体験学習(Experiential Learning)」という異文化への適応法を採用する。

「体験学習」は他の文化適応法と比べて優れている特徴として、「無理のない適応」ということである。認知行動療法の「押しつけ」を避け、学習者が自ら体験することを通して新たな行動様式を習得していき、今までの行動様式を自ら納得する形で修正していく。この方法のメカニズムとして、「具体的体験」、「体験の内省と観察」、「一般化する」、「自分の行動に仮説を作る」という4つの循環的なステップ(Fig.1, 津村・星野, 1996)を踏まえ、自らの行動への気づきを通して、新たな行動様式を身につけることである(Gudykunst & Hammer, 1983; 八代・町・小池・吉田, 2009)。また、この方法に基づき、訓練の参加者は、

どのように自分の行動を変化させる仕方を学び、訓練の場を離れて日常の体験の中からも新たな行動様式を学んでいくことが可能となる。

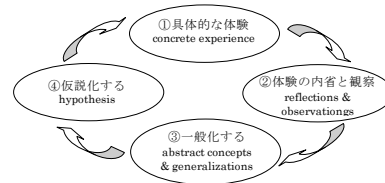


Fig.1 体験学習のステップ

一方、本研究では、適応の対象者を在日中国人に焦点を当てる。その背景には、就学・留学などの目的で日本に入国している在日中国人の数は最近になって、飛躍的に増えている。彼らは就・留学生全体の6割~7割を占めている(文部科学省・日本教育振興協会, 各年次資料)。また、最近、中国人就・留学生は、日本の教育機関で勉強した後、日本企業に就職する人が多く(法務省広報資料・留学生等の日本企業等への就職について, 各年次資料)、相対的に長い期間にわたって日本に滞在する特徴がある。2005年現在、日本に居住する中国籍の外国人登録者数も50万人を超えた(法務省統計)。そこで、本研究では、人数が多い、滞在期間が相対的に長いという現実的なことを考慮し、在日中国人の日本文化適応をはかる試みを行う。

本研究のような「文化特定」は、適応者側の問題を焦点化しやすくなる。また、体験学習を導入することにより、適応者の無理のない適応と適応効果の持続が期待できる。

2. 研究の目的

以上の研究背景を踏まえ、本研究の目的、日本社会に増え続けてきた在日中国人の日本適応を支援するための、より適応する側に考慮した訓練プログラムを提供することにある。この目的を実現するために、(1)在日中国人の日本文化適応について特有なニーズに調査を通して明らかにする。その上、(2)ニーズに照らし合わせ、「体験学習」の方法論に則って、適応を促進する訓練のプログラムを開発する。さらに、(3)訓練の実践および追跡調査を通して、プログラムの効果および持続効果を検証する。

3. 研究の方法

本研究は、平成21年度10月以降と平成22年度、合わせて1年半をかけて、3つの研究に分けて実施した。(Fig.2)。それぞれの研究の大枠は下記の通りである。

研究1:平成21年度では、中国文化の出身者(中国人就・留学生)に焦点を当て、彼らの

日本文化に適応することに特有なニーズを整理した。

研究2：その上、従来の在日外国人の異文化適応研究で得られた知見を踏まえつつ、研究1で得られた中国人学生の日本適応に必要なニーズをラボラトリー・メソッドによる体験学習の方法に載せ、訓練のプログラミングをした。

研究3：プログラムを中国人学生に実行し(研究3-1)、プログラム前後の効果および追跡調査の効果をさまざまな適応指標を用いて検討した(研究3-2)。

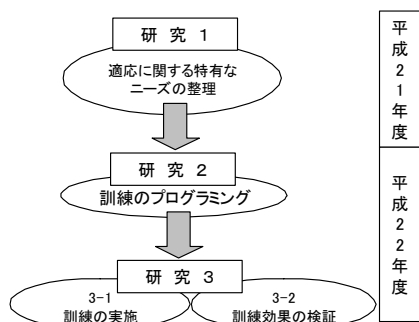


Fig.2 研究遂行の流れ

それぞれの研究は具体的に以下のように実施された。

研究1は、中国人就・留学生の日本文化に適応することに特有なニーズを明らかにするために、(1)自由記述調査と(2)質問紙調査を行った。

(1)自由記述調査については、関西にある大学と日本語学校に在籍している中国人留学生と就学生153名(男性84名、女性69名;平均年齢 23.52 ± 3.31)を対象に、2009年12月から2010年2月までに「人間関係に関するアンケート」と題する無記名式の自由記述質問紙を用いて調査を行った。

質問紙には、調査対象者の基本属性の項目、自由記述項目が含まれていた。基本属性の項目では、調査対象者の性別、年齢、所属する教育機関、来日の年数、出身地域、来日までの学歴・仕事経験、来日後のアルバイトの経験、さらにホストファミリーの有無、ホームステイ経験の有無などの質問項目を設定した。自由記述項目では、日本人との人間関係を中心内容とした4つの質問を設定し、すべての自由記述項目は箇条書の形式で回答を求めた。

4つの質問は、①あなたが同級生や同僚とつきあう中で、日本人が中国人と異なると思った点は何か;②あなたが日本人の同級生や同僚とつきあう中で、彼らがあなたを「困らせた」点は何か;③あなたから見た日本人同士(同級生や同僚)のつきあいの特徴は何か;④日本人の同級生や同僚と友達になりたい時、どうすればいいと思うか;であった。

質問紙で用いられた言語は中国語であった。回答の際には、日本語能力の低い回答者に配

慮すると同時に、回答者にとって細かな表現ができるように中国語で回答するように求めた。

基本属性項目に対して統計分析を行った。4つの自由記述の質問項目に関しては、KJ法(川喜田,1986)に基づき、社会心理学を専攻する中国人留学生の大学院生2名および中国人の大学教員1名が協議をしながら、回答の分類・整理を行った。

(2)質問紙調査では、(1)でまとめられたリストに基づき、調査項目に作成し、日本の大学や日本語学校の中国人学生99名(男性57名、女性42名)の自記式質問紙調査を行った。また、他の社会的スキル尺度であるKiSS-18とJICSも取り入れた。

研究2では、異文化適応において必要となる社会的スキルが、文化共通のものと同様にしようとする文化に特有のものによって構成されるという先行研究の知見を踏まえ、中国人学生の日本適応のプログラムは文化共通のスキルと日本文化の独自のスキルのそれぞれを促進する部分によって構成されることが望ましいと考えられる。文化共通的なスキルを向上する訓練プログラムは従来の先行研究の知見を活用する。一方、日本文化の独自のスキルを向上するプログラムは研究1で明らかとなった中国人学生の日本文化適応のポイントを押さえた上で作成する。また、本研究では、異文化適応の訓練に効果が期待できるラボラトリー・メソッドによる体験学習の方法論を用いてプログラムの作成を行った。

研究3

(1)訓練の実施 研究2で考案された中国人学生の日本文化適応のための訓練プログラムを、関西にある大学に在籍している中国人学生22名(男性8名、女性14名;平均年齢 26.37 ± 2.58)を対象に、2010年10月から11月までに一週間間隔で6つセッション(1セッション1時間)を実施した。

(2)社会的スキルの測定 プログラム実施の開始前と終了直後において、下記の自己報告式の社会的スキル尺度を用いて、参加者の社会的スキルのレベルを測定した。①中国人大学生社会的スキル尺度ChUSSI(9件法、4因子:「相手の面子(PM;19項目)」、「社交性(SA;12項目)」、「友達への奉仕(AB;6項目)」、「功利主義(CO;4項目)」;Mao & Daibo, 2006)、②KiSS-18(社会生活で一般に必要なと考えられるスキルのリスト、5件法、18項目、菊池,1988)及び、非言語コミュニケーション尺度ACT(非言語的なメッセージを表出するスキルのリスト、9件法、13項目;Friedman, Prince, Riggio, & DiMatteo, 1980)、③日本の対人コンピテンス尺度JICS(5件法、5因子、「察知能力(PA;6項目)」、「自己抑制(SR;7項

目)、「上下関係の調整(HRM;3項目)」、「対人感受性(IS;3項目)」、「曖昧性への耐性のなさ(TA;3項目)」; Takai & Ota, 1994)。本研究では、①～③までの尺度の内容を、順に中国文化、共通文化、日本文化の社会的スキルを反映するものと位置づける。そのほか、④研究1まとめられた「中国人学生の認識した日本人の人間関係尺度」(5件法, 3因子: 「集団ルールの重視(GR;12項目)」、「日本的やり方への心理的ストレス(PS;10項目)」、「日本的思いやり(JC;10項目)」。⑤滞在国の対人スキル獲得尺度(異文化環境下のスキルの獲得能力, 4件法, 6項目; 田中, 1998)。⑥異文化適応感尺度(異文化に慣れた度合い, 4件法, 4因子, 「滞在国の言語(JL;4項目)」、「学生生活(SL;4項目)」、「ホスト親和(HF;4項目)」、「心身の健康(PH;4項目)」; 植松, 2010)。⑦在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度(中国系留学生が周囲の日本人からサポートを得られる度合いのリスト, 4件法, 29項目; 周, 1993)。

(3) **訓練の維持効果の追跡調査** 訓練終了3ヵ月後の2011年2月に上記の測定と同じ内容で参加者に追跡調査を行った。

4. 研究成果

研究1の(1) **自由記述調査**から、以下の結果が得られた。

① **調査対象者の基本属性** 年齢 男性 23.79±3.81歳, 女性 23.20±2.58歳で, 男女の年齢差は有意ではなかった($t(151)=1.08$, ns)。したがって, 得られた回答には, 男女の年齢差による影響は少ないと考えられる。

② **所属の教育機関** 大学と日本語学校にそれぞれ70名(全体の46.05%)と82名(全体の53.95%)が在籍していた。

③ **来日の年数** 平均値は 2.11±1.68($n=152$)年であった。調査対象者のほとんどは, 日本文化適応の初期段階にいと判断される。

④ **出身地域** 中国の北部および南部出身の者がそれぞれ103名(全体の67.32%)と50名(全体の32.68%)となっていた。この割合から, 調査で得られた回答は中国全土の若者の日本に対する印象であると言えよう。

⑤ **来日までの学歴** 高校卒業者は82名(全体の53.59%)で, 大学・大学院卒業生・修了者は71名(全体の46.41%)であった。調査対象者の学歴には偏りがなかったと言えよう。

⑥ **来日までの仕事経験** 52名(全体の33.99%)の調査対象者が来日までに仕事を体験したことがあった。仕事の経験年数の平均値は1.57±1.81($n=50$)年であった。

⑦ **アルバイトの経験** 経済的理由により, 来日の中国人学生はアルバイトをする人が多い。本研究では, 中国人学生は普段日本社会に接触する機会としてとらえ, その経験については調べた。135名(全体の88.24%)の調

査対象者がアルバイトを経験しており, 仕事期間の平均値は1.52±1.37年であった。また, 職種については, ほとんど飲食店やコンビニといったサービス業に従事していた。

⑧ **ホストファミリーの有無およびホームステイの経験有無** 10名(全体の6.54%)の調査対象者はホストファミリーの世話を受けており, 52名(全体の33.99%)の調査対象者は日本人の家庭でのホームステイを経験していた。

(2) 自由記述調査項目

得られた記述に対して, 質問ごとに整理を行った。その際, まず質問に対して明らかに答えにならない記述や累積度数2以下の記述を省いた。そして, 残された有効な記述に対して, 同じ記述や類似した意見をカテゴリー化した。カテゴリー化の作業には, できるだけ調査対象者の細かな意見を反映するように心がけた。

4つの質問のうち, 質問①から質問③で得られた記述は中国人学生の日本人の対人関係に対する意見とし, 質問④は中国人学生が自ら考える日本人とよりよい人間関係を結ぶための解決策であるとした。問題点と解決策を対応させる形で4つの質問から得られた記述の全体まとめを行った。

質問①, ②, ③から12の共通カテゴリーを, 3問中に2問に共通するカテゴリー12を, 質問①, ②, ③のそれぞれから, 独自に3つ, 5つ, 1つのカテゴリーをまとめることができた(Table1)。

Table 1 自由記述調査から得た記述のまとめ

質問①	質問②	質問③	質問④
本人が日本人の対人関係や人間関係で、日本人が日本人と異なる点の具体的な記述	本人が日本人の対人関係や人間関係で、日本人が日本人と異なる点の具体的な記述	本人が日本人の対人関係や人間関係で、日本人が日本人と異なる点の具体的な記述	本人が日本人の対人関係や人間関係で、日本人が日本人と異なる点の具体的な記述
件数	件数	件数	件数
42	42	38	46
12	9	14	19
44	28	47	45
12	41	43	32
23	36	20	10
17	24	31	6
7	7	8	13
18	20	7	2
9	9	5	22
13	2	13	23
9	11	4	27
1	27	4	15
2	4	7	5
17	4	7	10
36	9	6	4
2	4	6	4
4	22	22	46
7	9	24	26
7	27	27	20
2	9	9	10
7	7	7	4
12	4	13	13
2	2	2	2
22	19	7	20
11	11	11	11

(独)は質問④で得られた記述の中で, 質問①～③の記述に対応しないカテゴリーを表す

中国人学生が違和感を覚えるのに主に3つの原因があると考えられる。1つ目は, カテゴリーの中身が中国と日本の間で同じだが, その量が違う。例えば, 中国でも日本でも儒教の教えに基づく「礼儀」や「上下関係」というものが存在するが, 日本の方がよりこれらの点に重みを置くために中国人学生が違和感を覚えている。2つ目は, 日本の対人関係に独自に存在するものがある。例えば, 「自分のことを押さえる」といったカテゴリーのように, 欧米文化および中国文化にあまり存在しない。3つ目は同じ集団主義文化におい

て、中国式と日本式のやり方の違いがある。例えば、「割り勘」に関しては、日本人は一回ずつその場で精算を行うのに対して、中国人は1人で全額を負担し、会う回数を多くすることを通して、長いスパンで互いに負担額のバランスをとる。負担額は結果的に同じだが、やり方に違いがある。田中(2000)は欧米、アジア出身の留学生を対象に、「日本人との対人関係形成・維持に関する困難」について自由記述調査を行った。本研究で得られた上記の中国人学生が違和感を覚える理由の1つ目と2つ目に該当するカテゴリーは田中(2000)の結果と重複している。しかし、本研究で得られた違和感を覚える3つ目の理由は従来の研究には見られず、中国と日本のような同じ集団主義文化の対人関係の差異を理解するのに貢献した。

質問④から得られた記述を整理した結果、質問①から③までの意見に対する解決策のようなカテゴリーが多く存在している。例えば、日本人の対人的「距離感」に対して、「自発的に日本人と交流する」や「つきあうチャンスを作る」ことでその距離を縮める。また、「割り勘」のやり方に対して「郷に入れば郷に従え」という考え方で受け入れる。一方、「真摯・誠実」の態度で対応することや「実力を認めてもらう」など、現状の問題と別に、調査対象者が独自に考えた戦略行動もあった。これらの小さなカテゴリーをとりまとめ、最終的に、「文化理解を深める」と「上手い交流を目指す」という2つの上位カテゴリーが得られた。前者は知識を蓄積するという内容を、後者は行動を積極的に実行するという内容を反映している。

従来の研究では、出身文化に関係なく外国人学生全体の日本文化適応のニーズが明らかにされてきた。本研究では、中国という文化を特定したことにより、中国人学生と欧米文化などの他文化出身の学生と共通の日本文化適応のニーズおよび中国人学生に独自のニーズを明らかにすることができた。併せて、問題解決のヒントも得ることができた。今後、本研究で得られた中国人学生の日本文化適応のニーズおよび解決策をベースに、彼らが日本人と円滑な対人関係を形成させるために、社会的スキルの観点から、トレーニングのプログラムを作成し、実行することが期待される。

研究1の(2)質問紙調査から、以下の結果が得られた。

①**因子分析の結果** Table1 まとめられたリストで作成された質問紙で得られたデータに基づき、37項目の評定値に対して、因子分析(共通性の初期値としてSMC用い、反復推定をおこなった主因子法、プロマックス回転)を行った。その結果、中国人学生の認識した日本人の人間関係の特徴、言い換えれば、

中国人学生が日本人との対人関係の形成に必要なことが3つの因子(32項目)によって構成されることが明らかとなった。第1因子は「上下関係を重視する」、「仕事にまじめ」、「ルールに沿って物事を進む」などの日本社会での集団生活のルールを反映する項目によって構成されたため、「集団ルールへの重視(GR;12項目、 $\alpha=.87$)」と命名した。第2因子は「よく自分の感情を抑える」、「建前と本音が違う」、「時々ストレスを感じる」、「距離を保つ」などの中国人学生にとってストレスとなる日本人のつきあう方を反映する項目によって構成されたため、「日本的やり方への心理的ストレス(PS;10項目、 $\alpha=.72$)」と命名した。第3因子は「人間関係が単純で利害関係に触れない」、「相手の立場に立って問題を考えて、相手の意見を重視する」、「独立性を重視し、頼りあいことをしない」などの日本社会での思いやりの行動を反映する項目によって構成されたため、「日本的思いやり(JC;10項目、 $\alpha=.69$)」と命名した(Table2)。

Table2 中国人学生の認識した日本人の人間関係の特徴の因子分析(主因子法)の結果

項目	F1	F2	F3	h^2
F1:集団ルールへの重視 ($\alpha=.87$ 固有値 = 5.76)				
12 上下関係を重視する	.81			.50
13 公私混同しない	.73			.45
1 言葉遣いは丁寧	.66			.39
23 仕事にまじめ	.62			.49
25 団体意識が強い	.56			.42
20 仕事に細かいことに気をつける	.55			.33
14 ルールに沿って物事を進む	.53			.34
22 社会生活のルールと秩序を守る	.51			.47
6 礼儀に気をつける	.50			.30
15 プレゼントの良し悪しより気持ちを重視する	.48			.22
24 信用を重視する	.47			.53
10 婉曲に自分の考えを述べる	.38			.25
F2:心理的ストレス ($\alpha=.72$ 固有値 = 2.68)				
28 よく自分の感情を抑える		.59		.46
8 建前と本音が違う		.59		.42
3 つきあいを多くしない		.58		.35
29 時々ストレスを感じる		.50		.29
30 自分の損得を考える		.45		.24
11 「はい」と「いいえ」を曖昧にする		.44		.21
4 平淡な関係を保つ		.42		.19
2 距離を保つ		.36		.15
32 人に時には冷たく、時には暖かく接する		.34		.20
9 表と裏で違うことを言う		.30		.24
F3:日本的思いやり ($\alpha=.69$ 固有値 = 4.12)				
26 人間関係が単純で利害関係に触れない			.64	.50
17 相手の立場に立って問題を考えて、相手の意見を重視する			.53	.27
19 自分と同じ類の人を排斥する			.48	.30
21 礼を受けたら、礼をもって返す			.46	.39
16 ちょっとしたことですぐ怒る			.42	.16
18 独立性を重視し、頼りあいことをしない			.33	.22
7 摩擦があつたら自ら謝る			.32	.15
31 人に暖かく接する			.29	.17
5 割り勘をする			.24	.20
17 相手の年齢・婚姻・収入などのプライバシーを尋ねない			.23	.15
因子間相関関係				
	F2	- .13		
	F3	.54	-.01	

②**他の尺度との相関関係** 3つの因子がKiSS-18 および JICS との相関関係は Table3にある。「集団ルールへの重視」因子はKiSS-18 と強い正の相関関係、JICS の TA 以外の因子と中程度以上の正の相関関係をもっている。「日本的思いやり」因子は KiSS-18 と強い正の相関関係、JICS の IS と TA 以外の因子と中程度以上の正の相関関係をもっている。「心理的ストレス」因子は KiSS-18 と強い負の相関関係がみられ、JICS のいずれの因子とも相関関係をもっていない。これらの相関関係から、一般的な社会的スキルそして日

本社会的スキルを身につけているほど、日本社会で生活するのに必要なルールや思いやりといったことがうまくこなせるのに対して、一般的な社会的スキルが保有しないほど、「感情を抑える」ことや「本音と建前の使い分け」といった日本社会独自の対人関係の特徴に慣れないことを意味する。得られた因子が論理的妥当性を有すると考えられる。

Table3 特徴認識の3因子の
KiSS-18 および JICS との相関係数

	KiSS	PA	SR	HRM	IS	TA
集団ルールへの重視	.582 **	.337 **	.339 **	.570 **	.431 **	.048
心理的ストレス	-.430 **	-.151	-.197	-.134	-.057	.161
日本的思いやり	.421 **	.276 **	.431 **	.483 **	.143	.025

** $p < .01$

研究2では、方法の部分で述べたプログラム作成の方針に基づき、「文化共通的なスキル編」と「日本文化の独自のスキル編」によって構成された6セッション(1セッション1時間)の訓練プログラムを作成した。

(1)「文化共通的なスキル編」は大坊・中野・栗林(2000)やMao & Daibo(2007)が用いたプログラムを参考しながら、参加者の「人とのコミュニケーションをとるための言語的/非言語的なスキル(e.g. 視線・表情の使い方; 自己表現)」、「集団の中で人と関わるスキル(e.g. 問題解決の仕方)」など、どの社会においても生活における基本的な(文化一般の)社会的スキルをトレーニングのターゲットとして設定した。

(2)一方、「日本文化の独自のスキル編」は研究1で明らかとなった「集団ルールへの重視」、「日本的やり方への心理的ストレス」、「日本的思いやり」に含まれた項目の内容を、八代・町・小池・吉田(2009)で紹介された異文化適応のシミュレーションに載せ、参加者の「文化間の違いを捉えるスキル(e.g. 異なるルールを発見する力, 対処する仕方)」、「文化間摩擦を対応するスキル(e.g. 行動の裏にある考え方を理解する仕方)」、「援助の獲得やストレスの解消に関するスキル(e.g. ソーシャル・サポートを得る仕方, リラクゼーションの方法)」など、異文化としての日本社会で人付き合いに用いる社会的スキルをトレーニングのターゲットとして設定した。

研究3で得られた結果は下記の通りである。

(1)訓練の効果 参加者のそれぞれの尺度における訓練前後の得点変化を検討するために、項目の合計得点を尺度の得点とし、対応のある t 検定を行った。中国文化を反映した社会的スキル尺度 ChUSSI の4因子中、「社交性」因子において有意差がみられ ($t(20)=2.16, p<.05$), 訓練後の得点 ($M=73.95, SD=13.45$) が訓練前 ($M=71.77, SD=11.97$) より有意に高かった。「相手の面子」、「友達への奉仕」、「功利主義」の3つの因子には、有

意な変化がみられなかった(順に, $t(20)=1.06, ns$; $t(19)=1.64, ns$; $t(21)=1.61, ns$)。

文化共通的な社会的スキル尺度のうち、ACTにおいては、有意差がみられ ($t(21)=2.13, p<.05$), 訓練後の得点 ($M=68.23, SD=11.73$) が訓練前 ($M=64.05, SD=11.34$) より有意に高かった。KiSS-18においては、有意な変化がみられなかった ($t(20)=0.70, ns$)。

一方、日本文化を反映した社会的スキル尺度 JICS の5因子中、「自己抑制」因子と「対人感受性」因子において有意差がみられ(順に, $t(21)=2.61, p<.05$; $t(21)=3.64, p<.05$), 訓練後の得点 ($M=26.41, SD=4.62$; $M=10.27, SD=2.41$) が訓練前 ($M=24.05, SD=3.46$; $M=9.00, SD=2.27$) より有意に高かった。「察知能力」、「上下関係の調整」、「曖昧性への耐性のなさ」の3つの因子には、有意な変化がみられなかった(順に $t(21)=1.19, ns$; $t(21)=0.67, ns$; $t(21)=0.00, p=1.00$)。

このように、文化共通的なスキルと日本文化のスキルのレベルの向上を目指す日本文化適応プログラムは研究の狙い通り、文化共通のスキル(ACT および文化共通スキルとしての「社交性」因子)と日本文化に関係するスキル(「自己抑制」因子、「対人感受性」因子)の向上に貢献している。

その他の尺度においては、いずれも有意な変化がみられなかった。

(2)訓練の維持効果 訓練の維持効果を検討するために、参加者の訓練前、訓練後、そして3ヶ月後におけるそれぞれの尺度での得点に対して、参加者内の一元配置の分散分析を行った。その結果、文化共通の社会的スキル尺度の ACT においては、有意な差がみられた ($F(2,36)=5.59, p<.01$)。主効果を検定したところ、訓練後 ($M=68.26, SD=12.21$) および追跡調査 ($M=68.68, SD=10.89$) の得点のいずれも訓練前 ($M=63.16, SD=10.86$) より高かった。

日本文化を反映した社会的スキル尺度 JICS の5因子中、「察知能力」、「自己抑制」と「対人感受性」の3つの因子においては、有意な差がみられた(順に, $F(2,36)=4.59, p<.05$; $F(2,36)=3.06, p<.10$; $F(2,36)=6.25, p<.01$)。それぞれの因子の主効果の検定を行った。「察知能力」については、追跡調査 ($M=22.58, SD=2.85$) の得点が訓練前 ($M=21.00, SD=3.39$) より高かった。「自己抑制」については、訓練後 ($M=26.41, SD=4.62$) の得点が訓練前 ($M=24.05, SD=3.46$) より高かった。「対人感受性」については、訓練後 ($M=10.27, SD=2.41$) および追跡調査 ($M=10.16, SD=2.34$) の得点のいずれも訓練前 ($M=9.00, SD=2.27$) より高かった。

そのほかの尺度においては、有意な差がみられなかった。

これら結果から、3ヶ月後の追跡調査においては、訓練終了後の効果が維持されたと言えよう。

訓練直後および追跡調査で得られた効果から、本研究で開発した中国人学生の日本文化適応プログラムは文化共通のスキルと日本文化に関するスキルの向上に効果を有すると結論づけることができる。本研究における「在日中国人の日本適応を支援するための、より適応する側に考慮した訓練プログラムを提供すること」という研究目的が達成できたと言えよう。今後の本研究で開発したプログラムを在日中国人の日本文化適応に関する分野での応用が期待できる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計4件)

1. 毛新華, 在日中国人学生を対象とする異文化適応スキル訓練の効果, 日本社会心理学会第52回大会, 2011.9.19(予定), 名古屋大学
2. 毛新華, 在日中国人学生の日本文化適応に関する検討—適応の問題点と適応トレーニングの試み—, ワークショップ「異文化間交流とアイデンティティ (3) —留学生研究の最前線」, 日本心理学会第75回大会, 2011.9.16(予定), 日本大学
3. Xinhua MAO Why are Chinese students in Japan distressed in their interpersonal relationships with Japanese?, 12th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology p112, 2011.1.27, the Henry B. Gonzalez Convention Center San Antonio, TX, USA
4. 毛新華, 在日中国人学生の抱える文化適応の問題点—対人関係の自由記述調査のデータより—, 日本社会心理学会第51回大会発表論文集p682-683, 2010.9.18, 広島大学

[図書] (計1件)

1. 毛新華, 文化における社会的スキルの役割, 大坊郁夫 編著『幸福を目指す対人社会心理学—対人コミュニケーションと対人関係の科学—』, ナカニシヤ出版, (2011), 印刷中のためページ数未定

6. 研究組織

(1) 研究代表者

毛 新華 (MAO XINHUA)

大阪大学・人間科学研究科・助教

研究者番号：90506958